

テンナンショウの話

数 井 教 隆

春のうらかな日ざしにさそわれて野山に出かけてみるといろいろな植物が目につきます。雪がとけて間もないころは、木々もまた葉を広げていないので、林の中は明るく、カタクリやキクザキイチゲなど、人の目を引く花がいろいろ咲きほこっています。春に花を咲かせる植物には、カタクリのように他の植物に先きかけ葉を広げ、花を咲かせてしまうものもありますが、木々が葉を広げ出すころに芽を出して花を咲かせる植物もいろいろあります。これから紹介するテンナンショウという植物もそんな植物の一つなのです。

〔テンナンショウとは〕

テンナンショウといってもどんな植物なのかすぐに分かる人は少ないと思いますが、ウランソウとかマムシグサの仲間といえは多少分ってもらえるかもしれません。

テンナンショウに近縁な植物には、歌でよく知られているミズバショウやその花の形から名づけられたザゼンソウ、五月の端午の節句のときにつかわれるショウブ（ハナショウブは別の仲間）、それに食用のヤツガシラやサトイモなどがあります。また、おでんに使われるコンニャクは、この仲間のコンニャクと呼ぶ植物のイモ（球茎）からつくられたています。これらテンナンショウに近縁な植物を全部まとめてサトイモ科の植物と呼び、テンナンショウの仲間だけを呼ぶときにはテンナンショウ属という名前が使われています。

サトイモ科は、世界中に約120属知られており、テンナンショウ属はその中の1つの属です。

サトイモ科	ショウブ属	ウランソウ
	サトイモ属	マムシグサ
	ミズバショウ属	コウライ
	テンナンショウ属	テンナンショウ
	ザゼンソウ属	ヒロハ
	_____	テンナンショウ
	_____	_____

〔テンナンショウの生えているところは〕

サトイモ科の植物の大部分は、東南アジアや南アメリカのアマゾン川流域など熱帯のじめじめした地域に多く分布しています。しかし、テンナンショウ属は、他のサトイモ科の植物と違い、温帯でたくさんの種に分かれています。そしてサトイモ科の中では一番広く分布している属です。テンナンショウの大部分は、温帯に生えているのですが、熱帯地方に生えているテンナンショウも知られています。しかし、熱帯地方に生えているといっても実際には、1000m～2000m位の高地にかぎられています。熱帯地方の高地は一年中温暖なため、温帯の植物とよく似ている植物が生えています。テンナンショウもその1つです。このようにテンナンショウ属は、温帯や熱帯の高地に分布しています。このため、同じテンナンショウ属の植物でも、熱帯のものと温帯のものでは生活様式が大きく異なっています。つまり、熱帯の高地に生えているものは一年中温暖な気候なので、常緑で、花の時期も一定ではありません。花の咲いている株のすぐ隣りでもう実をつけている株が見られるということもおこります。一方、温帯に生えているものは、四季の変化にうまく対応し、秋になると葉が枯れてしまい寒い冬を越します。そして、春になると再び芽を出し花を咲かせます。

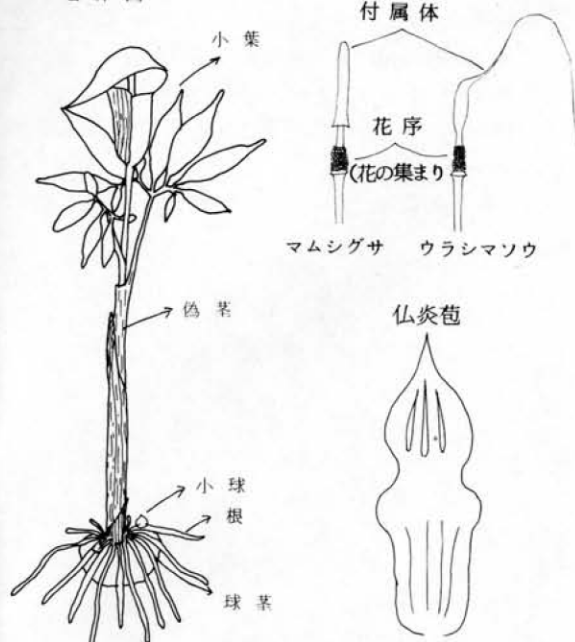
〔テンナンショウの特徴〕

テンナンショウの花や葉はどんな特徴を持っているのでしょうか。これから花や葉について少し説明しましょう。

1. 花のつくりと特徴

テンナンショウの花はふつう、雌雄異株（花ふんをつくるおしべが集まった雄花とめしべしかない雌花が別々のからだにできる）です。花のつくりをかいた絵で説明しましょう。花の外側は仏炎苞と呼ばれる葉のようなもので包まれています。花の中は、こん棒状のもののまわりをおしべ

全体図



またはめしべがたくさんとしかこんでおり、こん棒状の先は、丸くなっているものやむちのように細長く伸びたりしており、付属体と呼ばれています。このようにテンナンショウの花には花びらがなく、仏炎苞に包まれているだけです。そして、花を咲かせているときの様子が、まるで蛇ががま首を持ち上げているように見えたり、偽茎の模様が蛇に似ていたりするのでマムシグサと呼ばれるようです。

2. 葉のつくり

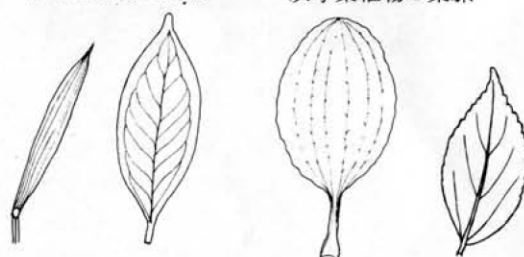
葉は、小葉と呼ばれる小さな葉が3～5枚あるいはそれ以上集まってできています。そしてその葉が1枚ないし2枚根元から出ています。小葉はどれも重なり合わないように一層で水平に広がっています。林床の少ない光を有効に使えるよううまく適応したかたちだと思われます。そして、茎のように見える部分は、葉柄(葉をささえ、茎とむすぶもの)が長く、太くなって茎のようになったもので偽茎と呼ばれています。

〔テンナンショウのおもしろい性質〕

テンナンショウの葉は変わりものです。花を咲かせる植物を2つに分けると裸子植物と被子植物に分けられ、その被子植物は単子葉植物と双子葉植物に分けられます。この単子葉植物と双子葉植

単子葉植物の葉脈

双子葉植物の葉脈



イネ科 テンナンショウ オオバコ エノキ

物を区別する特徴の1つとして、葉脈の模様が使われます。つまり、単子葉植物はイネなどのように平行な葉脈を、双子葉植物はククなどのように網目状の葉脈をしています。ところがテンナンショウは単子葉植物に含まれているのに網目状の葉脈をしています。ところで余段になりますが、テンナンショウと同じ様に双子葉植物の中にも変わりものがあります。それはオオバコです。オオバコは双子葉植物に含まれますが平行な葉脈をしています。道はじによく生えていますから見つけてよく観察して見て下さい。

前にテンナンショウは、雌雄異株であるを書きましたが、雄とか雌はどうやって決めるのでしょうか。野山に生えているテンナンショウを数多く調べてみると次のようなことに気がつきます。それは、大きなテンナンショウは雌花を咲かせ、小さなテンナンショウは雄花を咲かせるということです。これは何を意味しているのでしょうか。そうです。テンナンショウの雌雄を決めているのはその株の栄養状態、いかえればイモ(球茎)の重さによるのです。養分をたくさん貯えて重くなったイモからは雌花が、小さくて軽いイモからは雄花が咲くのです。今年雌花が咲いていても、花が咲いてすぐに葉を切ってしまうと養分を十分貯えることができなくなると、イモが軽くなってしまい、次の年に雄花を咲かせることがあります。また、ときには、間性(おしべとめしべの両方があるもの)のテンナンショウもみられます。

〔富山のテンナンショウ〕

これまでテンナンショウの一般的な特徴や性質をいろいろ書いてきましたが、富山県に生えているテンナンショウには、ウラシマソウ、マムシグサ、コウライテンナンショウ、ヒロハテンナンシ

ヨウなどの4種類が知られています。

以下にそれぞれの特徴を簡単に書いてみましょう。

○ウラシマソウ

北海道の南部から中国地方東部や四国まで広く分布している。富山では、海岸近くの林や平地・低山に見られる。仏炎苞は、紫色で先がたれさが。付属体は先が細くむち状に伸び、仏炎苞の外まで伸び出している。この様子が浦島太郎のつりざおに見たてられ、ウラシマソウの名前がつけられた。球茎(イモ)は扁平で子球がたくさん付いている。株のまわりには子球から育った子株が多く生えている。葉は普通、1枚で9から15枚の小葉が、はうちわ状についており、深緑色でつやがある。偽茎には、紫色の小斑が多数ある。

○マムシソウ

おもに西日本に分布し、山野の木陰に生える。仏炎苞は普通淡緑色または淡紫色で、白に縦すじがある。長さ9~15cmで先は細くなる。付属体はこん棒状で、先は丸くなり、幅6~7mm程である。偽茎には、紫褐色のまだら模様があり名前もこの模様にもとずいてつけられた。

葉は、小葉が5~13枚ありはうちわ状についている。小葉には白斑があることもある。葉は、普通2枚ついている。



ウラシマソウ



マムシグサ



コウライテンナンショウ



ヒロハテンナンショウ

○コウライテンナンショウ

北海道から九州の日本海側に広く分布しており、大陸にも見られる。仏炎苞は普通、緑色で白い縦すじが入る。付属体はこん棒状で細く、先は3mm内外である。全体として、マムシグサによく似ているが付属体の太さで一応区別できるがまぎらわしい。

○ヒロハテンナンショウ

九州から本州の日本海側や北海道に広く分布しており、山中の木陰に生える。球茎は扁平で小球がたくさんつく。葉は、普通、1枚で、5枚の小葉からなるが時に7枚のこともある。小葉が他のテンナンショウよりも広い。仏炎苞は普通、緑色で白い縦すじがあり凸凹している。付属体はこん棒状で先が少し太くなり2~4.5mm位になる。近畿地方北部には、変種のアシウテンナンショウが知られている。

〔テンナンショウと人間〕

現在では、テンナンショウは野山に生えている。人目につかない草ですが、昔の人々にはたいせつな草だったのです。人間が農耕を始める前、私たちの祖先は、野山に生えている木の実、草の実や根っこを集めて食料にしていました。テンナンショウは、地中に養分を貯えるためにイモをつくるので、昔の人がこれを見のがすはざありません。テンナンショウのイモは、昔の人にとって大切な食料だったのです。しかし、テンナンショウのイモはそのままではとてもアクが強く食べられません。そのため、皮をむき、つぶして、水で何度もさらし、底にたまった澱粉を集めて食用にしていました。八丈島では、この島に生えているシマテンナンショウをヘンコダマと呼び団子にして食べたそうです。

また、テンナンショウは漢方薬としても使われています。イモを薄く切って乾燥させ、タン切りや痛み止めなどにも使われます。

＜かずい きょうりゅう 植物担当＞